

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

草木百化譜  
第十六輯

大正  
11. 10. 26  
内文

始



ひやくじつかう (百日紅)

學名 Lagerstroemia indica, L.

異名 さるすべり 紫微

漢名 百日紅 怕痒樹

科名 千屈菜科 Lythraceae

高一丈餘に達する落葉性喬木、又は灌木にして多くの枝條を分ちて繁茂す、嫩枝は四稜をなし、樹皮の滑澤なる故に「さるすべり」の名あり。葉は互生し橢圓又は、卵形にして兩端銳形又は鈍形にして平滑光澤あり、羽狀脈をなし隆起し時々微毛を生ずることあり、九月より十月頃新梢に頂生圓錐花序をなす、數多の花を堪敷し、花枝と花梗に毛茸を有するもの、又然らざるものあり、花は普通鮮紅色なるも、圓錐變種に紫紅色、白色、紅白紋り、淺黃等ありて、下部のものより漸次開花し、上部に至るその期間長さに涉るによりて「百日紅」の名あり、而して概ね六出にして、萼は平滑にして裂片は直立す、花瓣は六枚ありて圓形にして皺襞多く、細長さ爪あり、雄蕊は多數ありて長く、花絲縱長にして花外に出て子房は球形をなして、六室に分れ多數の胚珠を藏し、胚珠上昇して中軸に胎座す、花柱は雄蕊よりも稍々長くして彎曲し、柱頭は頭狀をなす。果實は蒴果にして橢圓狀球形をなし、長三四分にして熟すれば裂開して長く扁平にして直立し、頂端に一枚の翅ある種子を藏す。此の木は硬く折れ難きに依り、酒造家は榨木として用ふ。

備考 淡紫色のものを「むらさきさるすべり」と稱す。

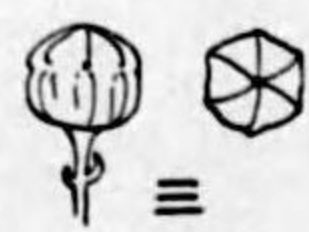
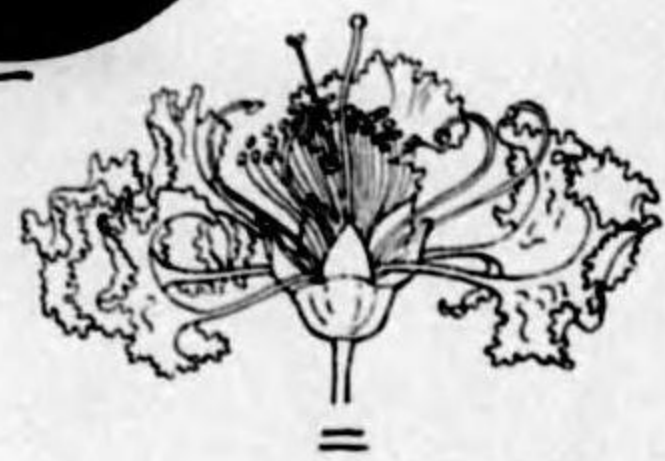


(大然自) 生寫て於に京東日十二月八年九正大 本

面側及面上の蕾(三)面側の花(二)面正の花(一) 附

(大然自上以) 葉印(四)

影撮者著てに京東月八年九正大 真 寫

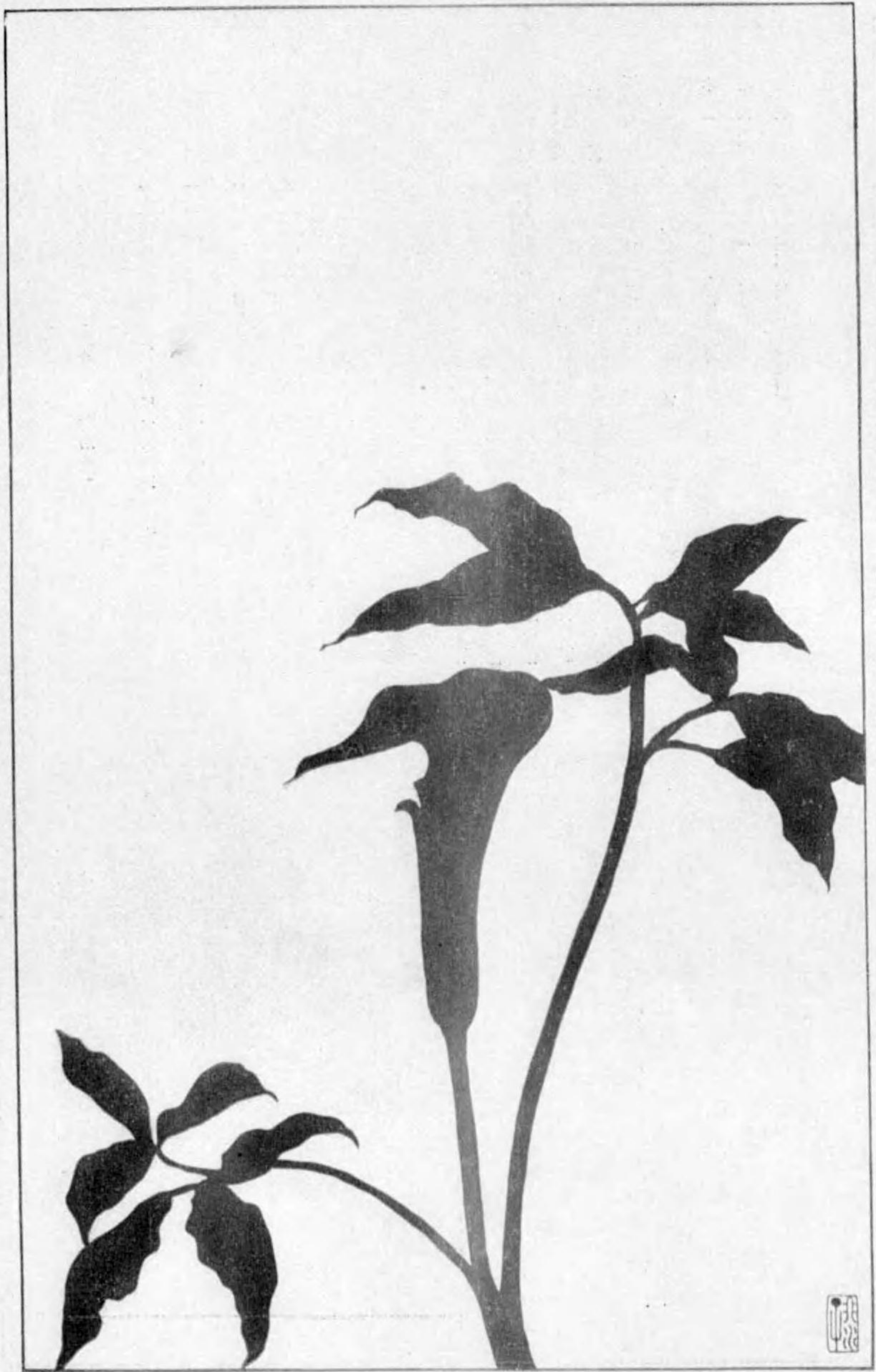


非水百花譜第十六輯目次

ひやくじつかう 百日紅  
 てんなんしやう 天南星  
 えびね 海老想  
 うばゆり 烏羽衣  
 はとばり 鳩尾









えびね (海老根)

學名 *Calanthe discolor*, Lindl

異名 すゞふり かまがみさう

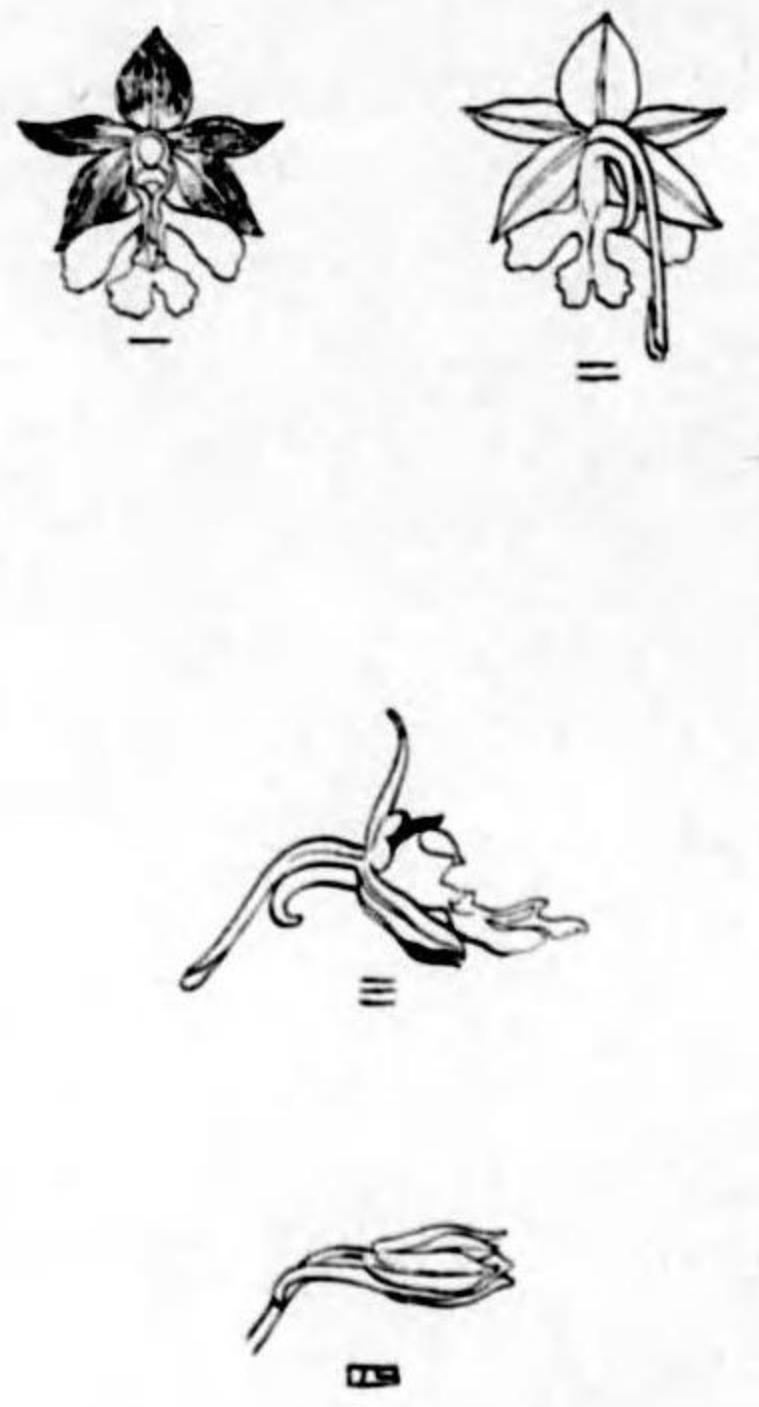
漢名 比 楡

科名 蘭科 (Orchidaceae)

各地の密地に自生する宿根性草本にして寒地に産するもの最も多し。本種は、常緑性のもので、落葉性のもので二種ありて、何れも根は数節よりなる、假球茎にして、恰も海老の腹部の如き外觀を呈するにより「えびね」の稱あり。葉は、短かさの、長さのあり、葉の嫩葉は摺葉状を呈し、晩春新芽の間かざる内に花茎を抽出す。花茎は、腋生のもの、頂生のもの、或は葉を着けたる根の側部より出するもの等あり。花は總狀花序の小花或は、中形のもの多数着生す。萼片は、二枚ありて、花瓣と同長にして、開展するも、稀に合着するものあり、花瓣は、廣さのもの、狭さのもの等あり、唇瓣は、花柱の頂端、又は基部に着生し、三裂す、その中央のものは、二裂するものあり、花柱も亦長短種々あり、蒴は、卵形又は、圓錐形を呈し、花粉塊鱗質にして八個ありて、二個宛相合着し、對をなし。蒴は下垂す。世界に産するもの四十餘種にして、その内本邦に産するもの十種餘あり。

本邦に産する普通種は、根茎匍匐して強硬なる纖維根を出し、葉は、假球形より出で、潤短にして基部狭く、鈍頂の長橢圓形を呈し、冬測み春發芽す、四五月の頃葉の未だ開かざる際に、中心より花茎を抽出、總狀花序の小花を着く、花は萼及花瓣共に淡褐色にして、基部は稍々青色を帯び、唇瓣は白色又は、淡紫紅色にして、中央裂片は一ヶ所深く裂れ凸起部白色にして基部に紅色の斑點あり、距は唇瓣よりも短く下部に到るに従ひ太く上端鈍形をなし、變種甚だ多きも、その主なるものを述べ次の如し。

- A 花に距を有するもの
- さばなえびね *C. var. hayana* のえびね *C. var. straha*
  - たかねえびね *C. var. hadon* さえびね *C. var. schoddi*
  - さんせうえびね *C. var. niponica* きりしえびね *C. var. alpinia*
  - からんりうえびね *C. var. japonica* かりしえびね *C. var. kirishitanensis*
  - たかさこえびね *C. var. formosana* りるらん *C. var. ventriculata*
- B 花に距なきもの
- さるめんえびね *C. var. thurina* こえびね *C. var. textori*
  - しまえびね *C. var. granilis* なつえびね *C. var. badaka*
- 等にして各々多少性質を異にし、又徳川時代に栽培流行せるため人工的變種も甚だ多く、その主なるものは、大えびね、大南京、金紫、茶ゆ、出船、紅梅、紫、鹿の子、白えびね、紅えびね、木紅雪白等の名あり
- 備考 學名の *Calanthe* は美しい花の意なり。



本圖 大正十年五月五日東京に於て寫生(自然大)  
 附圖 (一)花の正面 (二)花の背面 (三)花の側面 (四)蕾(以上自然大)  
 寫真 大正八年五月鴻の臺に於て田頭凱夫氏撮影



老  
核油非本  
海  
樹  
根

うばゆり (姥百合)

學名 *Lilium cordifolium* Thunb  
 異名 かばゆり やまくわら やまかぶら  
 漢名 蕎麥葉貝母  
 科名 百合科 (Liliaceae)

藪澤の陰地に自生する宿根草本にして、根は卵形にして黄白色を呈する鱗茎よりなり鱗片僅少なり。莖は樹指大にて、高三四尺に及び葉の初生ものは蕎麥の葉に似、老葉は大にして洋蓮葉の如く長一尺餘にして毛茸なく光澤を有して花を附けざる時は、百合と見ること難し。初生葉は、葉脈紫色を帯るもの又、全然緑色のものありて莖上一尺餘の處に七八葉輪形に叢生す。老葉は心臟形にして、網狀脈を有し、長柄を具ふ、叢生葉の中心より更に、二尺餘の一莖を出し、七八葉疎に着け、葉の上部に至るに従ひ漸次小く二三寸となる。莖上に三乃至五花を散らし短かき總狀花序をなし、花毎に一枚の薄苞を具へ、八月頃開花す。花蓋は六枚ありて、長さ四五寸にして横に向き開く、外部は白く稍々淡綠色を帯び、内部に暗紫色の斑點を存し正開せず、その先端は反曲し、長筒形をなす、雄蕊は六本ありて長さ相齊しからず、葯は黄色を呈し、灰白色の花粉を藏す。雌蕊は一本にして、其の柱頭は三稜をなし、子房は圓長にして縦に三溝あり、果實は長一寸五分位にして、廣き長橢圓形をなし、三片に開裂す。種子は多数ありて、各々翼を有し飛散す。此の種は、肥地に栽培する時は、高さ五六尺となり、従つて花密を附することも多し。

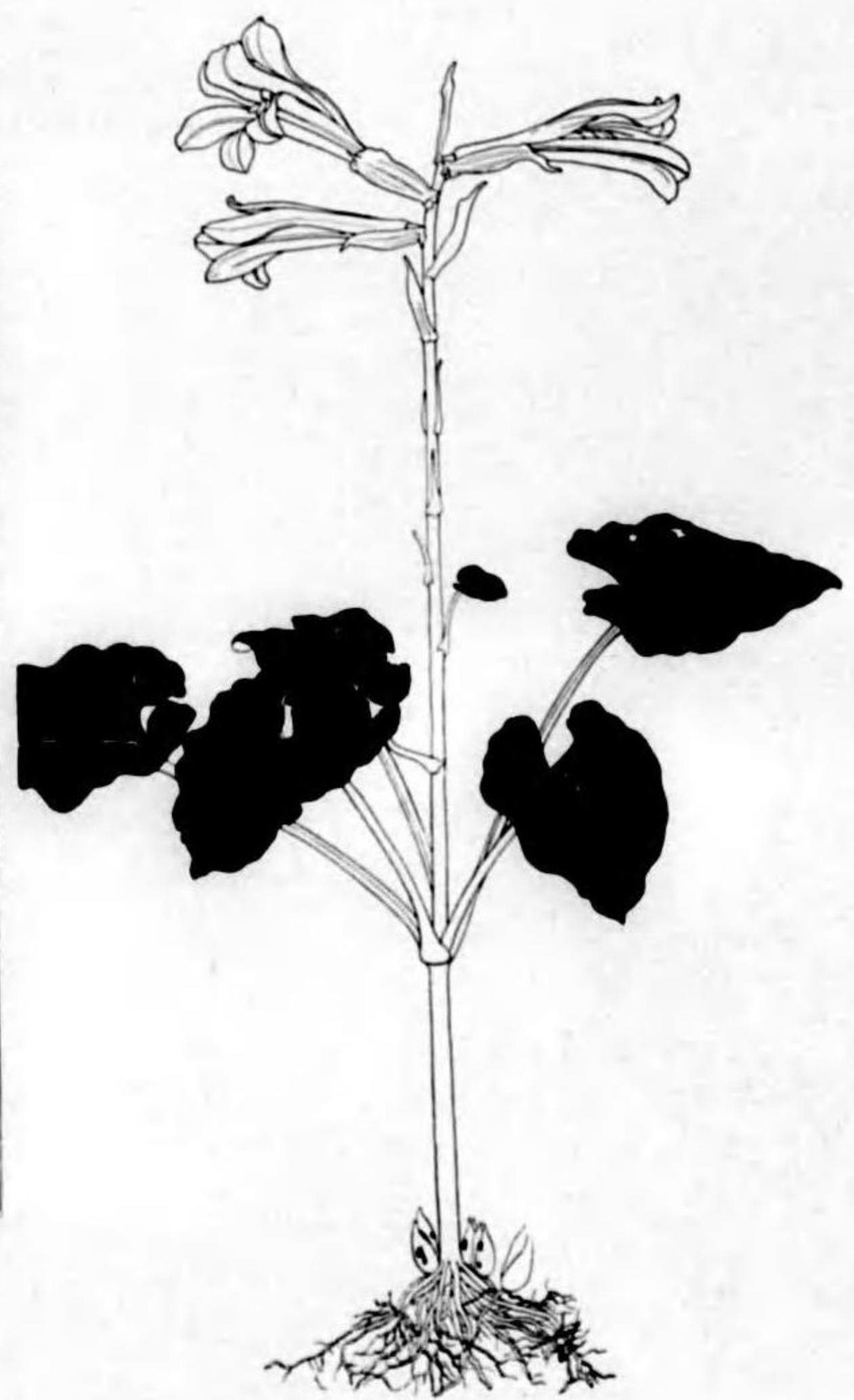
鱗茎は掘採して食用に供することを得、故に「やまくわら」「やまかぶら」の異名あり又鱗片には澱粉を含有すること多く、色純白にして品質佳良なる澱粉を作るを得、之を百合粉と稱して食用に供す、佐渡の貧民は葉葉を煮て食用とす。

備考 本種は開花の際往々葉枯れて無きより「うばゆり」の名あり

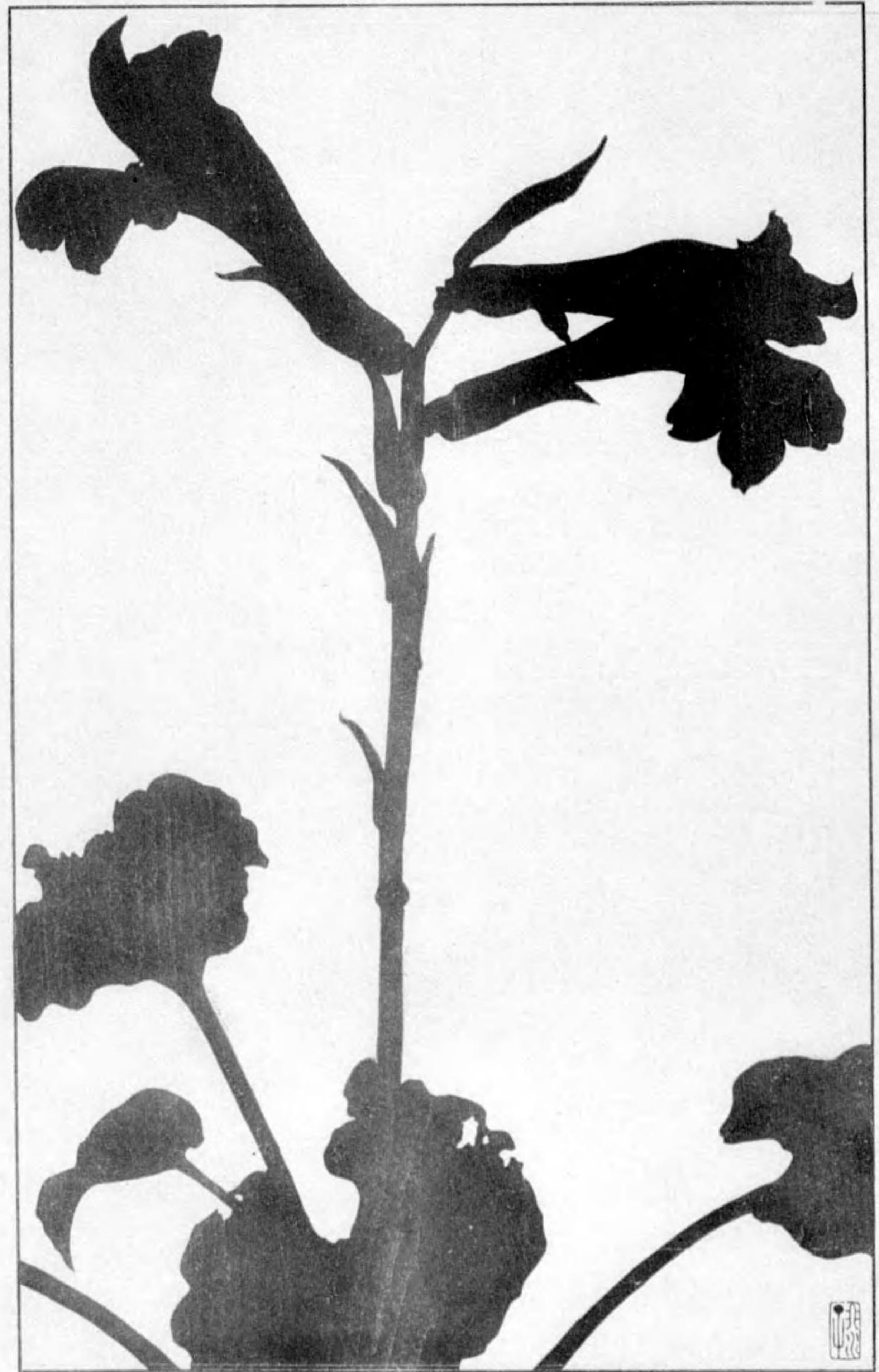
本圖 大正十年七月十八日東京に於て寫生 (自然大)

附圖 本植物の全形 (縮少圖)

寫真 大正十年七月東京にて著者撮影









はなしやうぶ (花菖蒲)

學名 *Iris laevigata*, Fisch. var. *hortensis* Max.

異名 どんどんばな

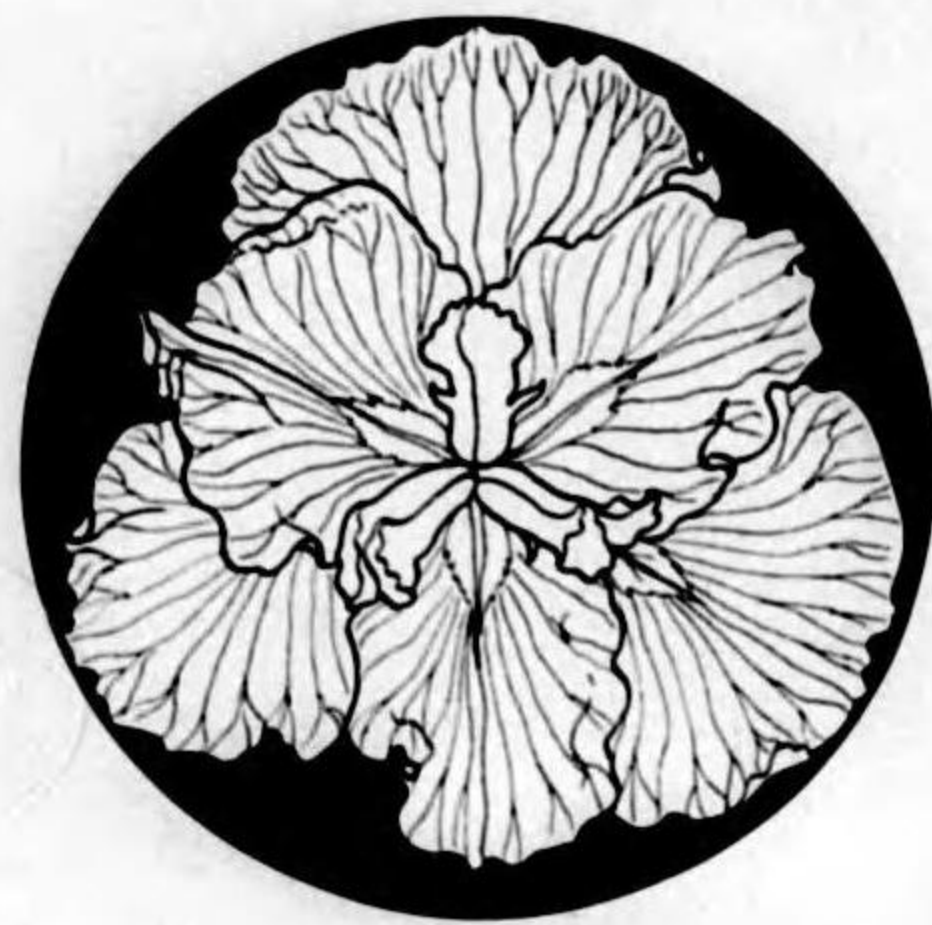
漢名 玉蟬花

科名 鳶尾科 (Iridaceae)

花言葉 好きおとづれ 愛の使者

本邦中部、北部及朝鮮、東部西比利亞等の山野に自生する耐寒性宿根草本にして、指大の地下莖より細き纖維根を出す、葉は年々新葉を地上に出し、狭長にして剣状を呈す、表裏共に同様にして、中央は隆起し葉面に數條の脈ありて白莖の葉に類似す。夏期葉間より真直の莖を抽出し、頂端に數個の花蕾を附け順次開花す、花の外側には廣き苞ありて、花を包み、開花すれば苞に相當する三枚の瓣様のもの外側に反卷し、花瓣とこの色を別つことを得ず、而してその内部に斜と稱する眞の花瓣三枚ありて直立す、苞と花瓣を總稱して花蓋と稱し、或は花瓣を内花蓋、苞を外花蓋と稱することあり。花心に一つの雄蕊あり、柱頭肥大し上端三裂して外方に曲り、其の裏面に各々短かき雄蕊を附着す、果實は蒴をなし、橢圓形にして三稜ありて、内部は三室に分れ、數個の種子を蔵す。

園藝品種は多く水溫の地に植るも、野生種は乾地の草間に自生し、花色は紫紅又は暗赤色にして、花弁にて鳥(からす)と稱す。此種は園藝變種甚だ多く、三枚の苞片の瓣様となりしものを、三葉咲と謂ひ、眞の花瓣の發達せるを六葉咲と稱し、尙多數の増加せるものを八重咲と稱す、又咲方によりて是を別てば、受咲、玉咲、在咲、牡丹咲、獅子咲、爪咲、連華咲等あり、その原種と見る可きものは「からす」及、信州附近に自生する「のしやうぶ」なり



本圖 大正九年六月二十一日東京に於て寫生 (大然白)

附圖 花の正面 (圖少縮)

寫真 大正八年六月東京に於て著者撮影





